

報告

夫に関する立ち会い分娩の効果と現状の把握

—夫婦間親密性尺度を利用して—

政岡永佳¹⁾ 赤松恵美²⁾ 池内和代³⁾

高知赤十字病院¹⁾ 川崎医療福祉大学²⁾

高知大学大学院人間総合自然科学研究科³⁾

The Current Status and Issues of Delivery with Presence of Husbands

- The Point of Marital Love Scale among Husbands-

Eika MASAOKA¹⁾ Megumi AKAMATSU²⁾ Kazuyo IKEUCHI³⁾

Japanese Red Cross Society, Kochi Red Cross Hospital¹⁾

Kawasaki University of Medical Welfare²⁾

Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Kochi University³⁾

要 旨

現在、日本では夫婦共同作業として夫立ち会い分娩が行われ、分娩へのニーズも多様化してきている。イクメンブームの影響もあり、夫立ち会い分娩を希望する夫婦が増加しており、今後も増加すると考えられる。本研究では、立ち会い分娩の効果の持続性を把握し、立ち会い分娩から数年経った夫の現状を把握することで、助産師としての関わりを導きだし、夫婦支援の示唆を得ることとした。高知県内の幼稚園、保育園に通園する0～2歳児の夫165名を対象とした。無記名自記式質問紙にて、夫の属性、立ち会い分娩に関する感情や状況等、現在の夫婦関係、菅原氏の夫婦間親密性尺度（MLS）等を用いて調査をした。その結果、MLSと立ち会い分娩の有無では有意差は認められなかった。現在の夫婦関係に関しては、セックスストレスの有無で有意差（ $p<0.05$ ）を認めた。夫に関しては、立ち会い分娩の有無は夫婦間親密性に関与しないことが明らかとなった。

キーワード：夫、立ち会い分娩、夫婦間親密性尺度、セックスストレス

Abstract

Recently, many men are choosing to be with their wives during delivery. Most husbands want to be there to offer physical and emotional support to their wives and discover what it means to really be there for their spouse. In Japan, delivery with husband attending is now a leading trend in major hospitals. Previous studies revealed that it was reported that there are many merits and demerits. The purpose of this research is to find the role of midwife and support couples. In this study, we studied marital love scale score of husbands after delivery. A self-administered questionnaire was conducted to husbands with preschool children who lived in Kochi prefecture, after informed consent and approved by the ethical institutional board of Kochi University, Kochi, Japan. The date was collected from June to August 2017, through kindergartens, and collected from 165. The questionnaire consisted of marital love scale and attributes

受付日：30年6月18日 受理日：30年9月19日

among husbands. Simple comparisons of means and SE of date were performed using Student's t-test. Difference with $p < 0.05$ was considered significant. The mean marital love scale score of delivery with husband present was 49.87 ± 10.35 , which was not significantly higher ($p < 0.05$) than that of wives of delivery without husband present 51.27 ± 12.10 .

Keywords: Husbands, Delivery with Presence of Husbands, Marital Love Scale, Sexless marriage

【緒 言】

日本では、1971年頃より精神的産痛緩和法としてラマーズ法が導入され、夫立ち会ひのきっかけとなった。1975年頃より「産ませてもらうお産から、夫婦協力して産む自然なお産」への意識が高まっており¹⁾、1980年頃から立ち会ひ出産ができる施設が増加し、50%に達したとも言われている²⁾。近年は、少産少子化や分娩へのニーズも多様化し、夫が妻の分娩に立ち会ひうケースが多くなったと丸茂³⁾らは伝えている。夫立ち会ひ分娩の意義は妊娠初期から夫婦ともにお互い協力し、出産へ不安、苦痛、恐怖などを乗り越えて素晴らしい感動的な出産体験をし、その後の子育てを行うためのスタートにすることにある⁴⁾。出産の喜びや苦労を一緒に味わい、わかちあえることで、夫婦のお互いの絆も深まると考えられている⁵⁾。男女による分業から男女による共有への意識が高まっている⁶⁾なかで、夫立ち会ひ分娩は、夫婦の中で夫婦共同作業として行われているだろう。分娩前からパパママクラスなどといった母親(妻)のみではなく、父親(夫)に対する分娩前教育の重要性も導きだされてお^{7)~13)}、妊娠、出産、育児における夫の役割は大きくなっていると理解する。近年のイクメンブームの影響もあり、日本では夫立ち会ひ分娩をする男性が着実に増えてきている²⁾。このように現在多くの分娩で夫立ち会ひ分娩が取り入れられており、夫立ち会ひ分娩時の夫役割に関する研究¹⁴⁾や分娩時の夫の体験や感情に関する研究^{14)~18)}も多い。夫立ち会ひ分娩を行う

ことで、父性が向上し、育児参加が多くなる⁵⁾との報告もある。しかし、マイナス面もあるのは事実である。立ち会ひ分娩時に体験した戸惑いや不安は育児や夫婦関係へ影響することや¹⁹⁾、パタニティ・ブルーになる夫もいることが明らかである²⁰⁾。そのため、夫の分娩体験は、その後の育児や夫婦関係へ影響すると考え、夫にとって肯定的な体験となることが望まれる¹⁷⁾。立ち会ひ分娩が日本で盛んに取り入れられるようになってから35年以上が経過しており、立ち会ひ分娩が当たり前のように行われつつある中で、今一度夫立ち会ひ分娩に関して振り返ることに意味があると考えられる。

本研究では、立ち会ひ分娩の効果の持続性を把握し、立ち会ひ分娩から数年経った夫の現状を把握することで、助産師としての関わりを導きだし、夫婦支援を模索することとした。

【方 法】

1. 対象者

対象者は、厚生労働省が調査した結果²¹⁾を参考に、末子が0~2歳間に離婚する割合が高率という結果を参考にした。産後2年間で夫婦にとって愛情の変化が著しい期間となっている可能性を考え、保育園・幼稚園の0~2歳児クラスに通う児の父親(夫)を対象とした。回答比率50%、標本誤差5%、信頼水準95%、回収率50%と予測し、父親約400名として必要な調査対象者は自記式質問紙を配布し、そのうち約200名の対象者が得られ

ると考えた。実際には、358名にアンケート調査用紙を配布し、無回答や記入不足を省き、有効回答165名（46.0%）を分析対象とした。

2. 調査方法

保育園の責任者に電話で研究の目的、方法等を説明し、許可が得られた施設に訪問、もしくは郵送の手段をとった。許可の得られた施設の園児の保護者に自記式質問紙を封筒に同封し、内容が見えない状態で配布してもらった。全ての質問紙に、研究への同意の有無に関してチェック欄を設け、対象者から同意の有無を記載していただいた後、質問紙に回答していただくようにし、同意を確認した。回答後は、テープを貼って提出してもらうことで、個人情報特定されることのないように対応した。作成した自記式質問紙は、A大学の学生の協力を得てプレテストを行い、質問紙の内容を吟味した。それにより、表現の修正、削除等を行い、対象者が答えやすいように配慮し、精度を高めた。

倫理審査承認後、6月から8月に実施し、各施設に郵送または訪問し、回収した。

3. 調査項目

1) 対象者の属性

現在の年齢、結婚年齢、就業形態、現在の1日就労時間、児に関する事等について質問した。

2) 夫立ち会い分娩に関して

自記式質問紙にて、先行研究³⁾⁷⁾⁹⁾を参考に作成した。その内容は、①立ち会い分娩に関しての情報では、「立ち会い分娩の有無」「立ち会い分娩を行った回数」「立ち会い分娩を行ったきっかけ」「立ち会い分娩時の児の情報」「出産前教室への夫婦での参加」「立ち会い分娩時に付き添った期間」等である。加えて、②立ち会い分娩を振り返った感情、③立ち会い分娩を振り返った

現在の思いや産後の夫婦関係についても質問した。

3) 夫婦間親密性

夫婦間親密性に関しては、菅原らによる夫婦間親密性尺度（Marital Love Scale:以下MLS）（ $\alpha=0.94$ ）を用いた²²⁾²³⁾。MLSは、恋愛尺度をもとに作成された夫婦の愛情尺度であり、開発者によって内的一貫性や妥当性、一次元構造が確認されている。各項目7段階評定で10項目であり、合計得点が高いほど愛情の得点が高くなる。本研究においてもMLS（ $\alpha=0.87$ ）であり、尺度の信頼性は保証されている。

4. 調査期間

2016年度高知大学医学部倫理審査委員会承認後、6月から8月まで実施した。

5. 用語の定義

- 1) 夫立ち会い分娩：陣痛開始から産婦の側に夫が付き添い、児出産の場面に夫が立ち会うこと²³⁾。
- 2) セックスレス：カップルの合意した性交あるいはセクシュアルコンタクトが1か月以上なく、その後も長期にわたることが予測される場合²⁴⁾。

6. 倫理的配慮

本研究は、高知大学医学部倫理審査委員会の承認を得て実施した。個人情報の保護に関しては、調査結果は個人を特定されないよう記号により暗号化し、電子データはパスワードを設定した外部記憶媒体で管理した。研究終了後は紙データについてはシュレッダーで破棄し、電子データについてはデータを完全に消去した。また、本研究における開示すべき利益相反関係はない。

7. 分析方法

データの収集後、各項目において単純集計を行った。その後、状況に応じて、t検定、 χ^2 検定等を行い、分析した。有意水準はp値0.05とした。統計ソフトSPSS Ver.24を用いた。

【結 果】

1. 属性

現在の夫の年齢は、平均年齢 34.2 ± 5.8 歳 (mean \pm S.D.) であり、結婚年齢は、 28.9 ± 5.5 歳であった。就業形態は、「正規の社員、職員」135名 (81.8%)、「自営業」29名 (17.6%)、その他1名 (0.6%) であった。現在の1日の就労時間は平均 9.1 ± 2.3 時間 (mean \pm S.D.) であった。就業形態は、「正規の社員、職員」135名 (81.8%)、「自営業」29名 (17.6%)、その他1名 (0.6%) であった。

2. 立ち会い分娩に関する情報

夫立ち会い分娩の有無について、「立ち会い分娩を行った夫」100名 (60.6%) であり、「立ち会い分娩を行っていない夫」65名 (39.4%) であった (図1)。立ち会い分娩の回数は、 1.5 ± 0.7 回であった。区分すると、「1回」51名 (51.0%)、「2回」32名 (32.0%)、「3回」10名 (10.0%)、「4回」1名 (1.0%)、無回答6名 (6.0%) であった。立ち会い分娩を行った時の分娩週数は、 39.2 ± 1.3 週であり、児の出生児体重は、 3101.8 ± 415.4 gであった。また、分娩所要時間は、 458.3 ± 389.5 分であった。妊娠中の両親学級やパパママクラスなどの出産前教室への参加の有無は、「参加していない夫」105人 (63.6%)、「参加した夫」60人 (36.4%) であった (図2)。

立ち会い分娩をしようと思ったきっかけについて (複数回答) は、「共に赤ちゃんの誕生を迎えたいと思ったから」45名 (45.0%)、「妻を支えたいと感じたから」32名 (32.0%)、「最

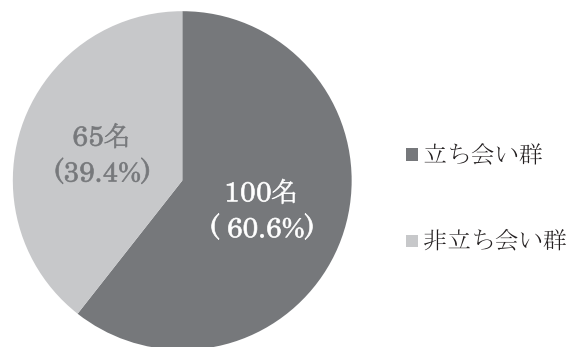


図1 立ち会いの有無

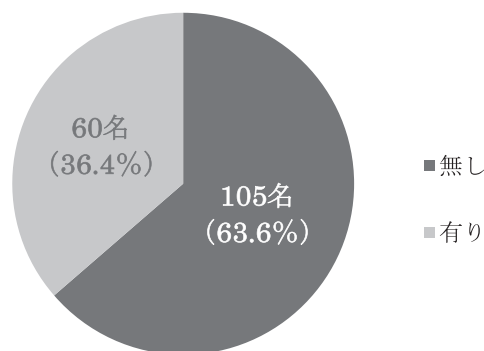


図2 出産前教室への参加の有無

近は立ち会い分娩が当たり前と思っていたから」15名 (15.0%)、「分娩がどのようなものか知りたいと思っていたから」6名 (6.0%)、「あまり立ち会い分娩をする気ではなかったが、その時の流れで立ち会うことになった」4名 (4.0%)、「妻に立ち会いをしてほしいとお願いされたから」3名 (3.0%)、「まわりの友人や知人が立ち会い分娩をしているから」1名 (1.0%)、「立ち会い分娩をすることで夫婦関係が良くなると思ったから」1名 (1.0%)、「その他」4名 (4.0%) であった。

3. 立ち会い分娩を振り返った現在の思い

立ち会い分娩をしてみて良かったかどうかについて、「良かった」100名 (100.0%)、「後悔

した」0名（0.0%）であり、立ち会い分娩を経験した全員が「良かった」と回答していた。

良かったと感じた内容については、「わが子の産まれる瞬間を妻と共に体験することができたこと」52名（52.0%）、「赤ちゃんが産まれるということの大変さを体感することができたこと」41名（41.0%）、「とても感動した」13名（13.0%）、「妻との距離が縮まった気がする」6名（6.0%）、「男としての責任感を感じることができた」6名（6.0%）、「妻が喜んでくれた」4名（4.0%）であった。辛かったと感じた内容については、「何もしてあげることができなかった無力感」21名（21.0%）、「状況についていけなかった」11名（11.0%）、「自分自身も妻につきっきりで眠れなかったり、食事をとることができずすごく疲れた」5名（5.0%）、「生々しく感じ、少し気分が悪くなった」4名（4.0%）、「セックスストレスになった」3名（3.0%）、「手や腕が痛くなった」2名（2.0%）、「妻に分娩中怒られた」3名（3.0%）、「想像していた出産と違った」2名（2.0%）、「妻の姿に困惑した」2名（2.0%）、「立ち会い

分娩の時のことがきっかけで妻と不仲になった」1名（10%）であった。

4. 出産後に関する事

出産後の現状では、「育児や家事は手伝っているほうだと思う」68名（41.2%）、「出産後セックスストレスだ」45名（27.2%）、「出産して妻は怒ることが増えたと思う」44名（26.7%）、「育児の分担でケンカすることが増えた」21名（13.0%）、「夫婦ふたりで過ごす時間が少なくなり、会話も減った」16名（9.7%）であった。

5. 夫婦間親密性尺度 (Marital Love Scale)

夫婦間親密性尺度の合計得点の平均値と標準偏差は、立ち会い群の夫では49.87 ± 10.35点、非立ち会い群では51.27 ± 12.10点であった。

夫婦間親密性尺度の合計得点を夫の立ち会い分娩の有無で比較したが、有意差は認められなかった（表1）。立ち会い分娩とセックスストレスの有無で有意差は認められず（表2）、

表1. <<夫>>立ち会い分娩の有無と夫婦間親密性の関連

	立ち会い有 (n=100)		立ち会い無 (n=65)		P-value
	mean	S.D.	mean	S.D.	
一緒にいると本当に愛していることを実感する	5.62	1.32	5.68	1.09	0.754
魅力的な妻だと思う	5.66	1.04	5.40	1.14	0.139
どんなことがあっても味方でいたいと思う	5.76	1.23	6.46	7.51	0.365
一人の人間として深く感謝している	6.14	1.12	6.05	0.99	0.619
妻が幸せになることは最大の関心事である	5.44	1.58	5.38	1.42	0.815
お互い会うために生まれてきたような気がする	4.57	1.94	4.46	1.84	0.730
言葉に出さなくても気持ちを察してくれる	4.41	1.78	4.66	1.64	0.377
妻のためならなんでもしてあげるつもり	5.27	1.60	4.94	1.40	0.175
今でも恋人同士の気がする	4.31	1.81	4.54	1.58	0.408
妻のことならどんなことでも許せる	3.61	1.92	4.07	1.78	0.125
【合計点】	49.87	10.35	51.27	12.10	0.429

*significant difference.

表2. <<夫>>立ち会い分娩の有無と出産後の関連

		立ち会い有(n=100)		立ち会い無(n=65)		P-value
		人	%	人	%	
出産後セックスストレス	ある	28	28.0	17	26.2	0.859
	ない	72	72.0	48	73.8	

表3. <<夫>>セックスレスと夫婦間親密性の関連

	セックスレス有 (n=45)		セックスレス無 (n=120)		P-value
	mean	S.D.	mean	S.D.	
一緒にいると本当に愛していることを実感する	5.27	1.35	5.79	1.16	0.016*
魅力的な妻だと思う	5.37	1.10	5.63	1.08	0.173
どんなことがあっても味方でいたいと思う	5.17	1.46	6.37	5.55	0.154
一人の人間として深く感謝している	5.86	1.34	6.20	0.94	0.077
妻が幸せになることは最大の関心事である	5.21	1.60	5.50	1.48	0.277
お互い会うために生まれてきたような気がする	4.33	1.98	4.60	1.87	0.408
言葉に出さなくても気持ちを察してくれる	4.02	1.98	4.69	1.59	0.027*
妻のためならなんでもしてあげるつもり	5.05	1.56	5.17	1.53	0.653
今でも恋人同士の気がする	3.83	1.70	4.62	1.69	0.009*
妻のことならどんなことでも許せる	3.41	1.79	3.95	1.89	0.100
【合計点】	47.07	10.15	51.67	11.17	0.017*

*significant difference.

夫婦間親密性尺度の【妻と一緒にいると本当に愛していることを実感する】($p=0.016$)、【妻は言葉に出さなくても気持ちを察してくれる】($p=0.027$)、【今でも恋人同士の気がする】($p=0.009$)、【合計点】($p=0.017$)で有意差を認めた(表3)。

【考 察】

今回の調査で、夫立ち会い分娩を行った夫婦は100組(60.6%)であった。50%以上であり全国的な夫立ち会い分娩の割合と同様であった。立ち会い分娩を行った夫に対して、立ち会い分娩を行おうと思ったきっかけは、【共に赤ちゃんの誕生を迎えたい】と回答した夫が45名(45.0%)で最も多かった。半数近くの夫が妻と共に赤ちゃんの誕生を迎えたいと感じており、家族が増える瞬間を夫婦で迎える体験を行おうとしていた。立ち会い分娩で辛かったと感じたことは、【無力感】を感じる夫が21名(21.0%)で最も多く、このことは、先行研究¹⁶⁾と一致していた。次いで、【状況についていけなかった】11名(11.0%)であった。妊娠期から、立ち会い分娩を行うか行わないかの有無のみならず、具体的にどの時期からどこまで立ち会うのかなど、どのような立ち会い分娩にしたいか問診を行うことで夫

婦が望む立ち会い分娩のスタイルを助産師が理解することができる。そうすることで夫の感じる無力感や状況についていけなかったと感じる思いの軽減につながると考える。本研究の結果もふまえ、そのためにもまず、出産前教室のさらなる内容の充実が必要ではないかと考える。出産前教室へ参加した夫は60人(36.4%)とまだまだ少ない。出産前教室に夫婦で参加できる状況・環境をつくることもさらなる課題であると考え。

夫婦間親密性尺度(MLS)の関連に関しては、本研究では全ての項目において有意差が認められなかった(表1)。これまでの先行研究において、夫立ち会い出産をすることにより夫婦の親密性は高まり、1か月後も持続することが明らかとされ²⁵⁾、夫立ち会い分娩は夫婦の親密性を高める契機として重要である²⁶⁾との報告もあるが、本研究の出産後2年間までの期間では、立ち会い分娩の親密性に対する効果の持続性は認められなかった。立ち会い分娩の効果による長期的な影響はあまり期待できないが、分娩時に夫婦で我が子の誕生を迎えたいと願う夫婦の思いに応えていくことに、助産師としての役割があると考え。

出産後においては、セックスレスが無いと回答したほうが夫婦間の親密度が高いことが

明らかとなり（表2）、産後のセックスレスの重要性を感じる結果であった。玉熊ら²⁷⁾の研究では、性的関係は夫婦の関係性と密接であることが明らかになっていた。そして、産後のセックスレスを危機的状況とし考察している。本研究でも、産後の夫婦性生活は愛情や親密性に大きく関係していることが明らかとなった。2004年のセックスと性の健康に関する世界41か国の35万人以上の実態調査の結果によれば、世界の中で日本は性交回数最下位であり、日本人はセックスが少ない民族である²⁴⁾ことを示している。そのため日本では、夫婦性生活自体が少ない可能性はあるが、やはり肉体関係には親密性が関与しているといえよう。

この産後2年までの親としての発達段階は“子どもを養育する段階”とされており、子どものために多大な時間を没入することになり、他の生活の側面との時間的な折り合いをつけることが課題となるとしている²⁸⁾。男性（夫）も子どもの誕生により大きく環境が変化することは明らかである。そのような状況の中で、夫婦が満足のいく夫婦性生活やセクシュアルコンタクトをとれることは夫婦間の親密性を高める鍵となると考察する。真剣にこの現状を受け止め、助産師として夫婦の生活を考慮しながら夫婦のスタイルに合わせた助言を行っていくこと、そして適切なアドバイスを行うことで解決する可能性もある。出産後の夫婦性生活やスキンシップに関しては、今後早急に対応していかなければならない課題であると考えられる。

立ち会い分娩の夫婦間親密性に関する効果は、産後2年までの育児期まで持続しておらず、夫の育児参加²⁹⁾などに加え、夫婦間のスキンシップやセクシュアルコンタクトが夫婦関係には重要であると考察する。

本研究では、夫立ち会い分娩に焦点を当て、夫婦間の親密性と産後の夫婦関係を含めた夫

婦支援へとつなげていくことができるよう考察した。多様化するニーズ、分娩様式の中で、夫婦で我が子を迎える方法のひとつとして、夫立ち会い分娩という方法があることを、夫婦に理解していただきたい。夫立ち会い分娩が夫婦間親密性に対する長期的効果はなくとも、絆を強めるきっかけになって欲しい。そして助産師としてそれに応えていく必要がある。

【結 論】

夫に関して、夫立ち会い分娩の有無は、夫婦間親密性に関与していない。

【謝 辞】

本研究を行うにあたり、御協力頂いた高知県内の保育園・幼稚園の園長先生をはじめ、調査票を手渡ししていただきました先生方、ならびに調査票に回答していただきましたお母様、お父様に厚くお礼申し上げます。育児を行いながら、貴重な時間をつかってご協力くださいましたことに心より感謝申し上げます。そして、本研究を進めるにあたり、ご指導いただきました先生方に深く感謝申し上げます。

【文 献】

- 1) 長谷川良人：私たちのお産からあなたのお産へ。株式会社メディカ出版。1997.
- 2) 竹原健二，須藤茉衣子：出産に立ち会う中で生じる男性の気持ちの変化に関する質的研究。日本助産学会誌。Vol.28. no.2. 164-172. 2014.
- 3) 丸茂尚子，三輪峰子：夫立ち会い分娩における助産師の介入についての事例分析。Gifu Journal of Maternal Healthk. vol. 33.

- 61-68. 2005
- 4) 関根憲治：夫立ち会い分娩の問題点と対策. 周産期医学. vol.23. no.7. 1037. 1993
 - 5) 郷田佳奈子, 小林康江, 小泉夫美子他：夫立ち会い分娩における助産師のケア. Ynamanashi Nursing Jounal. Vol. 7. no. 1. 33-38. 2008
 - 6) 我部山キヨ子他：助産学講座4 基礎助産学 [4] 母子の心理・社会学. 医学書院. 174. 2016
 - 7) 植松紗代, 河政美, 佐々木裕子他：立ち会い分娩をした夫の満足度調査. 京都市立病院紀要. 26 (1). 71-77. 2006
 - 8) 小玉和恵, 大川美恵子, 宮本由美子他：夫立ち会い分娩の効果と意識調査について. 仙台市立病院医誌. 10. 83 - 86. 1990
 - 9) 小林春香, 沼尾貴子：夫立ち会い分娩に対する夫婦の意識調査－両親学級と満足度との関連－. 三病医誌. 17 (1). 21 - 21. 2009
 - 10) 岡本英恵, 田村一代, 立崎理香他：立ち会い出産をした夫からみたパートナークラス. 栃木母性衛生. (33). 38 - 42. 2007
 - 11) 森崎聡美, 小川久貴子：夫立ち会い分娩に臨む夫婦への援助の方向性 - 夫立ち会い分娩でより満足が得られるために -. 日本ウーマンズヘルス学会誌. Vol.2. 2003
 - 12) 三上里枝子, 村山より子, 久米美代子：立ち会い出産を通して変化する夫の気持ち. 日本ウーマンズヘルス学会誌. Vol.8. 2009
 - 13) 四宮美佐恵, 藤原弘子, 北村万由美他：出産時の夫の思い - 夫のバースレビューより -. インターナショナル Nursing Care Reseach. 14 (2). 2009
 - 14) 小原美和, 郡司信子, 平塚政子他：立ち会い分娩のアンケート結果から考える夫の役割と援助のあり方. 福島県農村医学会誌. 50 (1). 44 - 47. 2008
 - 15) 山田裕子, 小原小夜子, 初田聡美他：出産に夫婦で取り組んだカップルの主観的体験－バースプランからバースレビューまでを夫婦で取り組んで－. 大津市民病院雑誌. 11. 53 - 57. 2010
 - 16) 藤川友恵, 竹林桂子, 高野餅みち子他：立ち会い分娩をした夫の体験. 2015 The Journal of Nursing Investigation. Vol.13. no.1. 2. 29-37. March 31. 2015
 - 17) 寺内友香, 野口真貴子, 久米美代子：初産婦の夫が立ち会い出産に対して抱いていたイメージと実際との相違. 日本ウーマンヘルス学会誌. 67-77. 2010
 - 18) 石田夕紀, 堤優子, 片岡佳奈他：出産に立ち会った夫の妻と子に対する気持ち. 佐賀母性衛生学会誌. 19-21. 2010
 - 19) 出口信子, 米村聡実, 福井奈美子他：夫の分娩立ち会い体験の自己評価とその関連要因. 母性衛生. 40 (4). 468 - 472. 1999
 - 20) 小此木啓吾, 持丸文雄：周産期の臨床と父親の役割. 周産期医学. 18 (1). 115 - 119
 - 21) 厚生労働省平成23年度全国母子世帯調査報告書.
http://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/boshi-katei/boshi-setai_h23/ (最終アクセス2017.10.19)
 - 22) 菅原ますみ, 詫摩紀子：夫婦間の親密性の評価. 精神科診断学. 8 (2). 155-166. 1997
 - 23) 菅原ますみ, 八木下暁子, 詫摩紀子他：夫婦関係と児童期の子どもの抑うつ傾向との関連 - 家族機能両親の養育態度を媒介として -. 教育心理学研究. 50. 129 - 140. 2002
 - 24) 木村好秀, 斎藤益子：家族計画指導の実際第2版 少子社会における家族形成への支援. 株式会社医学書院. 24-25. 2014
 - 25) 内藤和子：夫立ち会い分娩における夫お

- よび妻の経験の分析. 助産学会誌. 5 (1).
14-20. 1991
- 26) 松田佳子, 吉永茂美: 妻の出産に立ち会った夫の背景と夫婦の親密性との関連. 母性衛生. 55 (2). 2014
- 27) 玉熊和子, 益田早苗: 産後育児期の夫婦のセクシュアリティについての検討 - 母親へのインタビュー調査結果から - .
Presented by Medical Online.33-41
- 28) 我部山キヨ子, 菅原ますみ: 助産学講座
4. 基礎助産学 [4] 母子の心理・社会学.
株式会社医学書院. 2016
- 29) 小野寺敦子: 親になることにともなう夫婦関係の変化. 発達心理学研究. 16 (1).
15-25. 2005